



ya

No. 25
2007.1.10

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

新春御慶

館長 椎窓 猛

自分史図書館だより“ya”も25号、3年次を迎えます。年々、思いがけない遠い町からの方々のご惠贈も数多くなって、書棚にはその一冊一冊が星のように輝き光っています。それを見て私はいい知れぬ感銘に包まれて参ります。生涯をかけて精魂こもる一冊一冊であります。それ故に自分史誌の聖地でありたいと念じています。ことしもよろしくお願ひ申しあげます。

風の街

河本 佐恵子

この町は風が強い
北国から帰ってきた息子がつぶやいた
そうかもしれない
地図の上でこの町は
信じられないくらい海に近いもの
同じところに長いあいだ暮らしていれば
気がつかないこともある
パンを買いにでた久しぶりの商店街にも
風が吹き抜けている
文具店の主人は白髪がふえ
角の花屋の女主人はころころと変わりなく
でもさびれてしまった商店街を犬とゆく
そういえばこの犬は
超小型の室内犬だったはずなのに
大きくなって力強く引張ってゆく
どこをどうまちがえてきたのかしら
いつも待ち合わせていた喫茶店はすでになく
あの恋もどこでまちがえてしまったのだろう



息子は部屋のなかでまだつぶやいているか
いつも向かい風ばかりだ と
アーケードの下をひとめぐりすれば
「貸店舗」の貼り紙が
万国旗のようにはためく商店街
まるで運動会が終わったあととみたい
犬の長い毛並みも風になびいている
その鼻づらの先に
この町からは見えない海がある
(北九州市八幡東区)

私の稀観本ノート その25

○信濃デッサン館20年『窪島誠一郎』
椎窓 猛

昨年晩秋、東京の友谷岡晃さんのガイドで、永年の希望であった窪島誠一郎氏の「信濃デッサン館」「戦没画学生慰霊美術館、無言館」を訪ねることができた。

これらの美術館設立のいきさつについては、窪島さんの著書によってあらまし了解はしていたものの、実

地に足を運んで、その場に立ってみると感慨新たなるものがあり、また本を読み返せば、活字が妙に親しく呼びかけてくる。

デッサン館の方は、天折画家村山槐多や関根正二、野田英夫らの遺作が展示され、この後に無言館の設立となっている。デッサン館企画に当たって、窪島さんは、富士銀行融資課に話をもちこんだ。あまり相手にしてくれなかった課であったが支店長のマユズミさんが熱心にきいてく

れた。このいきさつを読んでいると、人生、世間の妙を感じる。単純なレジャー施設観光だけでは人はすぐに飽きる。個性的な美術館の構想を語っているうちに銀行支店長のマユズミさんが協力者となる。場所は上田市郊外の寺の住職さんが好条件で貸してくれる——。おりから紅葉、落葉舞いしきる好日、窪島氏の熱情もしみて私らは二つの美術館を感慨深く参観したのであった。



○昭ちゃん人生

太田 毅

印刷会社社長中村昭治氏の一代奮闘記を、教育心理センター所長太田毅氏が描かれた人生人物伝である。

まえがきに太田氏は、人の一生は一場のドラマ、シナリオはそれぞれ自分が書き、主役を演じ、メガホンも自分が握る。凡作か名作か、自分の演技次第と述べられ、「昭ちゃん人生」三本の柱を説かれている。

(1) 我以外皆我師の吉川英治の言葉、感化力、(2) 文化貢献は印刷の仕事で一、(3) 学歴よりも実績主義。それから「金銭感覚」について一。企業家のすぐれた参考書でもある。

澄める瞳と

井上美保子

いつのまにか老楓もみじ散りつくし冬陽さし来ぬ日曜日
の縁
先人は不惑と呼べりこの年を我には遠き彼岸への道
教え子に祝はる夫に寄り添ひて二十五年の哀歓愛しむ
切らんとて高菜畑に踏み入れば膝までしとど露にぬれたり
子と共に貸自転車を踏みゆく萩の市街の穏けき昼
幕末の志士の感慨のこもりある松下村塾に塵ひとつなし

○南溟の勇士に捧げるうた

渡瀬和子

この航路 なき戦友のあ
としのび 波のまなかに
香華ささげゆく

安長好秋

この一冊は、比島、台湾沖縄海域洋上慰霊祭に参加された一団の追悼記を和歌山の渡瀬和子さんが編集されたものである。和子さんはあとがきに「多く海底に眠る英霊の尊さを今心に留めておかなければ——」との一心で出版を思いたれたとある。北海道石狩から福岡、とくに広川町が目立ち、沖縄までの人名簿があり、慰霊団長は広川町の渡辺守氏である。

○遅しき母

西村須美子

著者は北九州小倉の人。あとがきに書きはじめて8年の年月が過ぎたとまず述べられ一冊の本にしたよるこびが綴られている。

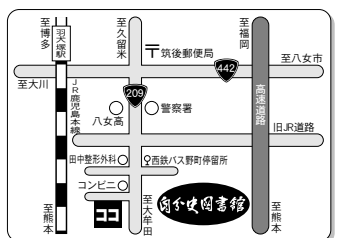
ページをめくっているうちにこんなくだりが強く眼をひきつけた。「希望や勇気をふるいたたせる言葉、人それぞれいろんな心の色を持っている」と傲慢、自己中心、人を悲しませ優越感を持つ心、言葉、嫉妬と不満の渦巻く嵐の心。穏やかで豊かな心の色、欲望、煩惱自分自身をかえりみて、思いやりを——と真摯に自からを問いなおされながら遅しく生きた一人の母の姿が描きだされている。



蔵書目録④ができます ¥100 円80 (郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時~午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8
TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分

インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。

編集掌記

福岡郷土の振興を最大に考えて仕事に当る。それを抜きにして、例えば東京、関西といった他都市への進出は考えない——といった内容であった。なんといっても我が立つ足もと、地盤のたしかさを——と共感。

▼師走の一日、福岡銀行の副頭取Sさんの経営談を、拝聴したが、もつとも心魅かれたのは、

▼「自分史サークル」黄櫨の会も十周年記念号を刊行。これもたしか郷土の文化事業。バックナンバー27冊を並べてみると、八女の地に生きる群像の心のもし火が輝いてみえる。これから団塊と呼ばれる世代の人生奮闘記を織りこんでもらいたいと希望したい。

(T・S)